

## 第 1 回検討会議における主な意見等

## 第 1 回検討会議における主な意見等

第 1 回の検討委員会では、市立幼稚園における特別支援教育の充実や幼小連携の推進、幼稚園教諭等の資質向上について各委員から以下のような意見がだされました。

### (1) 特別支援教育の充実

- ◆園においても、年々、情緒障害や発達が気になる子ども達が増加している。その中で一番懸念されるのが就学への接続である。
- ◆東区には言語に特化した施設というのが少なく、ことばの教室の拡充に期待している。
- ◆保護者アンケートは、回答率が 1/4 程度であり、これをもって保護者のニーズとはなかなか言い切れない部分もあると思う。
- ◆これまでのことばの教室、あゆみの教室の効果検証についてお尋ねしたい。
- ◆「ことば」についてはアンケートの結果からも一番ニーズの高い所ではあると思うが、「ことば」も含めた子ども達の育ちに関する様々な課題を切り離すことは難しい。
- ◆今後地域の拠点施設となるということであれば、少し地域的に偏在しているような状況も見られる。
- ◆肢体、病弱、弱視、難聴の子ども達についての特別支援教育はどのように考えているか。例えば医療的ケア児の受け入れ検討も一緒にしてもよいのではないか。
- ◆保護者が、児童発達支援センターなどの障がい児に特化した施設を選ぶのではなく、なぜ幼稚園を選ぶのか、その辺りも考えてなるべく健常な子どもたちと混ぜた教育をしていただければと思う。
- ◆幼稚園段階での子ども達への関わりには、やはりマンパワーが必要。また、仮に支援学級を設置した場合の教諭や学級支援員の配置などを示していただきたい。
- ◆向山幼稚園の支援学級の対象や受入年齢など検討が必要。
- ◆3 歳児 4 歳児 5 歳児をみれるような、ことばの教室・あゆみの教室が必要。
- ◆例えば並行通園や交流学級のような機会を作るといったような施策なども考えられる。いわゆる幼児教育と特に福祉分野の連携といったところが非常に重要になる。
- ◆最終的に目指すゴールについて、共通理解を図った方がよい。まずは 10 年 20 年のスパンでモデレートインクルージョンの体制を作っていくのが望ましいのではないか。
- ◆今市立幼稚園に支援が必要な子どもの入園を希望される方が増えてきている。園児数が少ないためしっかり手をかけてもらえるのではないかと期待が大きいと強く感じている。また、ことばの教室も、保護者の方は言葉を入りに自分の子供達をしっかり見たいという思いを持ってきていると思うので、今年度は、できる限りの子どもを受け入れて指導していくこととした。
- ◆通級の拡充はとても大事だと思う。それぞれの幼稚園保育園に通いながら、週に 1 回など個別にしっかり専門の先生に向き合ってもらってしっかり受け止めてもらって、それが就学支援へとつながっていると感じている。また、保護者の方と一緒に考えていけるような場になるとなおさらよい。
- ◆碩台幼稚園では、外国籍の園児の受け入れも多い。タブレットや携帯で翻訳したりすることもあるが基本は日本語で保育を行っている。生活の中で日本語を中心に取得しているというのが正直なところ。
- ◆例えば私立幼稚園保育園に通級を入れるという形も検討の余地があるのではないか。最終的に当たり前どの園でもそのサービスを受けられるようになったら間口も広がる。資金も大量に必要にならないし、人口が減少している中で市立幼稚園を維持するというのはとても難しくなってくるが、全園が担えばそこを維持する必要はなくなっ

てくるのではないか。

- ◆今後検討した方がよいと考えているのは、今回市立幼稚園に支援学級を設置するという計画があるが、実際スタートしてみるとニーズとして結構重度のお子さんが入級を希望されてくると思う。そうなってきたときにそこでの体制作りや看護師の配置の必要性などをどう考えるべきなのか。最初からその対象はそういったお子さん達ではないことを発表してしまうのも何か問題があるような気がする。それが現実的にはかなりハードルが高いだろうと思う。ここに対してどう考えるかということについて今後議論が必要である。
- ◆市立幼稚園が新たな価値を作り上げていくという風に少しポジティブに捉えている。例えば児童発達支援事業所と市立幼稚園あるいは私立の幼稚園における特別支援教育は、教育的ニーズと福祉的なニーズが重なりあう部分が当然ある。確かに児童発達支援事業所もかなり地域的にばらつきがあり、北区は少なく東区はかなり多い。そういった福祉的なニーズとか障害児の通所支援サービス事業の実態とも踏まえながら、市立幼稚園における特別支援教育の在り方、新たな価値を生み出していくための何か方策を講じていければと思っている。

## (2) 幼小連携の推進

---

- ◆公立の良さはその市の小学校と市の幼稚園という設置者が全く同じというところであり、そういう意味ではすぐ連携がとりやすく、よい事例がたくさん出ている。最終的には私立にも全部広めるという前提として進めて、今後も熊本市立だけでなく最終的には私立に入れることを前提として進めていくのはどうか。例えば、熊本市独自の取り組みとして、免許資格取るにあたって必ず最初の研修で実習期間を設けて何週間とか小学校と一緒に過ごすなどがあるとよい。

## (3) 幼稚園教諭等の資質向上

---

- ◆職員の専門性の向上が重要である。

### その他 市立幼稚園の役割・あり方について

---

- ◆今日議論していることは、最終的にどういう目標でやっているのかが不明確。議論の中で、市立幼稚園の今後のあり方とは、それは廃止も含めて議論するのか。
- ◆最終的に私たちが目指すのは、熊本市内に住む全ての子ども達がいかに健全に成長していくかを支えるのが私たちの役目であり、その基盤となるその幼児期の子ども達をどう育てていくか、1人残らず本当にその子一人一人に合った支援、そういう基盤を作っていくために、それに向かって何をしていくかということ、それぞれの立場でお考えいただいていると思うが、今ここではその中の市立幼稚園が何を担えるか、市立幼稚園でどこまで、どこをやればいいのかということ、今後さらに話し合いを進めて市立幼稚園のあり方というものをお示して、基本計画の中に役立てて頂きたい。

## 第1回検討会議における主な意見への補足説明等

### ① 「ことばの教室」の実績と効果・課題

#### (ア) 実績

- ・碩台幼稚園及び向山幼稚園に「ことばの教室」を設置  
(対象：5歳児 定員：120名 R3実績：161名 指導時間：80～90分)

#### (イ) 効果

- ・指導中の「できた！」を通して、幼児期のうちに、幼児の中に自己肯定感がしっかりと育まれた。
- ・指導員との良好な関係性が心理的な安定を育み、園や家庭で自分らしく過ごすことができるようになった。
- ・就学の支援や、入学に向けた配慮等、小学校への助言を行うことで、学校教育のスムーズなスタートをきるための土台となった。

#### 具体例

##### ◆通級児

- ・発音が改善され、自信をもって思いを出せるようになった。
- ・人とのかかわりで気後れしていたが、自分から関わろうとするようになった。
- ・家族によく話すようになった。
- ・笑顔が出るようになり、挨拶をするようになった。
- ・発音の誤りを指摘されると不機嫌になっていたが自分から言い直しをするようになり会話が増えた。
- ・自分の話し方(吃音)を理解できるようになった。

##### ◆保護者

- ・入学への期待を持つようになった。
- ・信頼関係ができ、相談をされるようになった。
- ・通級することで同じ悩みをもつ保護者同士と情報交換ができ安心した。

##### ◆所属園

- ・園でもいきいきとした表情が見られるようになった。
- ・通級児が経験したことを、保育の内容に活かされるようになった。
- ・園にいるときに気持ちや体験したことを自分から話すようになった。
- ・こどもの変化と共に保護者の変化もあり、接し方について一緒に考えることができるようになった。
- ・担任がことばについて状況や情報について知ることができた。
- ・周りの幼児に対して通級児の状況や頑張っている様子など説明できたり、より良い接し方を伝えたりできるようになった。

#### (ウ) 資質向上のための研修

- ・園内教室研修－毎月2回(計画 記録方法 事例研 面接打合せ等)
- ・合同教室会議－毎月1回
- ・所属園連携－訪問 電話
- ・熊本県難聴・言語障がい教育研究会に参加－毎月1回
- ・県親の会参加－年2回
- ・本園との合同研一人権研修

## (工) 課題等

- ・「ことばの教室」は中央区にしかなく、地域的に偏っている。
- ・「ことばの教室」の通級者は、ことば以外の課題を抱えていることも多い。

## ② 「あゆみの教室」の実績と効果・課題

### (ア) 実績

- ・川尻幼稚園に「あゆみの教室」を設置

(対象：5歳児 定員：24名 R3実績：32名 指導時間：80～90分)

### (イ) 効果

- ・指導中の「できた！」を通して、幼児期のうちに、幼児の中に自己肯定感がしっかりと育まれた。
- ・指導員との良好な関係性が心理的な安定を育み、園や家庭で自分らしく過ごすことができるようになった。友達と自ら関わろうとするようになったり、周りの様子に関心が出てきて集団活動に参加することができるようになった。
- ・就学の支援や、入学に向けた配慮等、小学校への助言を行うことで、学校教育のスムーズなスタートをきるための土台となった。

### 具体例

#### ◆通級児

- ・人とのかかわりで気後れしていたが、友達と自分から関わろうとするようになった。
- ・周りの様子に関心が出てきて、集団活動に参加するようになった。

#### ◆保護者

- ・指導後の面談を重ねるうちに、我が子のいいところがわかり、ほめ上手になってくれた。
- ・入学への期待を持つようになった。
- ・信頼関係ができ、相談をされるようになった。

#### ◆所属園

- ・園生活の中でいきいきとした表情が見られるようになった。
- ・通級での経験を保育に活かしてもらうようになった。(制作活動 ゲーム遊び スライムづくりなど)

### (ウ) 資質向上のための研修

- ・園内教室研修－毎月4回(計画 記録方法 事例研 面接打合せ等)
- ・熊本県情緒障がい教育研究会参加－年2回
- ・所属園連携－年2回(訪問 電話)
- ・就学先情報交換－年1回

## (工) 課題等

- ・「あゆみの教室」は南区に1園しかなく、地域的に偏っている。
- ・幼児の在籍園や児童発達支援センター等との役割分担や連携のあり方を検討していく必要がある。

### ③ 人材育成・研修等

#### (ア) 「あゆみの教室」設置時における取り組み

平成30年に設置した、「あゆみの教室」の開設にあたって以下のとおり派遣研修等を行った。

- ・中央児童発達支援ルーム つばめさんくらぶ（H30.5.1～5.31）
- ・社会福祉法人さつき会 さつきヶ丘保育園（H30.6.1～6.29）
- ・児童デイサービス おひさまクラブ（H30.7.2～7.31）
- ・神戸市立東灘のぞみ幼稚園、神戸市立本山南小学校（H30.10.22～10.26）

※特別支援教育スキルアップ派遣研修を活用

#### (イ) 特別支援学校教諭免許の取得推奨

特別な教育的支援が必要な園児が増加し、一人ひとりに応じた支援の充実のため、特別支援教育に関する一定の知識・技能を有していることが求められるため、特別支援学校教諭免許の取得を奨励している。

特別支援学校教諭免許保有率 29.4%（正職員 20.6%、講師 33.3%）（R3.5.1 現在）

#### (ウ) その他、研修等

・特別支援コーディネーター研修会、特別支援教育ブロック研修会、園内研修の実施・参加の他、週に1回程度事例研修及びケース会議等を実施。

### ④ 円滑な就学に向けた取り組みと課題

#### (ア) これまでの取り組み

- ・幼小接続カリキュラム（アプローチカリキュラム・スタートカリキュラム）の活用
- ・幼小中連携の日研修会による合同のテーマによる協議会や互いの授業・保育参観の実施
- ・学校探検、活動交流（栽培活動、行事交流 遊び 昼休み等）など幼児・児童の交流
- ・入学児童について、幼児教育施設からの指導要録の写しや移行支援シートを送付し、幼児期の育ちを伝え、教育内容のつながりを行っている。
- ・小学校では、入学児童に関して担当者を決め、「指導要録」「移行支援シート」「教育支援計画」を参考に、全ての園に連絡を取り、園からの情報を集め校内で共通理解を図っている。

#### (イ) 課題等

- ・幼小につながる3つの資質・能力や育ってほしい姿と従来の5領域の保育との関連性と具体的な実践がまだ不十分である。
- ・時間的に、幼小の参観の実現が難しく、隣接する幼小や互いに理解し合っていないと実現しにくい。
- ・入学したすべての児童の指導要録の写しの提出があった小学校は全体の13%であった（R3）。
- ・全入学児童分が小学校に引き継がれるのではないため、入学前の状況がわからない幼児もいる。

## ⑤ 特別な支援が必要な子どもの円滑な就学に向けた取り組み

### (ア) これまでの取り組み

特別な教育的支援を必要とする幼児について「移行支援シート」等を活用した引き継ぎを行っている。幼稚園と教育委員会が連携し、特別な支援が必要な子どもたちに対する研修等を行っている。

### (イ) 課題等

幼児教育施設から小学校へ「移行支援シート」を活用した引き継ぎ率は 68.4%（R2 年度）であった。今後は、「移行支援シート」等を活用した引き継ぎを円滑に行うために、市共通の参考様式を作成するとともに、幼児教育施設から小学校へ「移行支援シート」を活用した引き継ぎ率の R6 年度の目標値を 80% に設定し、取組をすすめる必要がある。

## ⑥ 外国籍の園児の受け入れについて

### (ア) 実績等

- ・碩台幼稚園を中心に外国籍幼児を受け入れている。
- ・R1～現在までに、インドネシア、パキスタン、中国、（台湾）、ベトナム、エジプト、ネパールなどの国籍の幼児を受け入れている。
- ・ICTの翻訳機能などを利用して母国語に翻訳するなどしてコミュニケーションを図っている。
- ・簡単な英会話ができる場合は、英語でコミュニケーションを図っている。

園名	H28	H29	H30	R1	R2	R3
碩台	10	7	11	9	5	6
楠	0	0	0	1	0	0
一新・向山・川尻・隈庄	0	0	0	0	0	0
合計	10	7	11	10	5	6

### (イ) 対応例

- ・園から配付する文書や「安心メール」の配信文書全てに英文を添える。
- ・その国の生活文化を尊重する。（例、ラマダン明けの欠席やピアスの装着等）
- ・タブレット端末に園での活動の様子を記録し、降園時に映像でお知らせする。
- ・登園や降園時に、身振り手振りも交えながら直接話す。
- ・活動に必要な道具、教材を準備してもらう場合は、「実物」を見せて確認をする。

### (ウ) 課題

- ・言語の問題に終始せず文化的なギャップをどのように解消していけばよいか。
- ・国籍は日本でも保護者が外国にルーツのある幼児が在籍しており、母国語がメインの生活をしているため、日本語での対応が難しいことも多い。

## ⑦ 小学校における通級による指導を受けている児童数（在籍校）

### ■ 通級指導教室の設置校数（区別）

R3.5.1現在（校）

区	言語	難聴	情緒	LD・ADHD	情緒・LA	総計
中央区	3	1	3	1	1	9
東区	2	1	3	1	1	8
西区				2	2	4
南区	1		1	1		3
北区	2		1	4		7
総計	8	2	8	9	4	25

※重複設置校があるため総計は各教室の和の値とは異なる

### ■ 通級による指導を受けている児童数（区別）

R3.5.1現在（人）

在籍校区	言語	難聴	情緒	LD・ADHD	情緒・LA	総計
中央区	43	1	45	19	30	138
東区	67	3	32	29	22	153
西区	14		4	36	10	64
南区	28	2	22	22	3	77
北区	36	1	11	43		91
総計	188	7	114	149	65	523

### ■ 通級による指導を受けている児童数（学年別）

R3.5.1現在（人）

学年	言語	難聴	情緒	LD・ADHD	情緒・LA	総計
1年	43	1	1			45
2年	53	1	14	10	5	83
3年	36	2	27	30	17	112
4年	31	1	31	42	11	116
5年	14	2	27	34	16	93
6年	11		14	33	16	74
総計	188	7	114	149	65	523

## ⑧ 小学校における特別支援学級在籍児童数（在籍校）

### ■ 特別支援学級の設置校数（区別）

R3.5.1現在（校）

区名	知的学級	自閉・情緒	肢体学級	病弱学級	弱視学級	難聴学級	総計
中央区	19	17	1	1		2	40
東区	17	18	9	4		2	50
西区	11	12	3	2	1	3	32
南区	19	17	3	2			41
北区	19	21	2	5			47
総計	85	85	18	14	1	7	91

※重複設置校があるため総計は各学級の和の値とは異なる

### ■ 特別支援学級の在籍児童数（区別）

R3.5.1現在（人）

区名	知的学級	自閉・情緒	肢体学級	病弱学級	弱視学級	難聴学級	総計
中央区	137	146	2	1		2	288
東区	185	210	12	7		13	427
西区	99	55	5	2	1	4	166
南区	142	148	5	3			298
北区	155	169	3	6			333
総計	718	728	27	19	1	19	1,512

### ■ 特別支援学級の在籍児童数（学年別）

R3.5.1現在（人）

学年	知的学級	自閉・情緒	肢体学級	病弱学級	弱視学級	難聴学級	総計
1年	120	80	4	3	1	3	211
2年	136	108	7	3	0	0	254
3年	103	138	2	3	0	3	249
4年	126	114	5	4	0	2	251
5年	117	142	7	0	0	6	272
6年	116	146	2	6	0	5	275
総計	718	728	27	19	1	19	1,512